

学習指導要領における 中学校・社会科の特徴

－地理的分野の授業作りにおける指導の試み－

山本憲志郎

〈目次〉

1. はじめに
2. 中学校社会科学学習指導要領における地理的分野の特徴と変遷
3. 新学習指導要領に基づく地理的分野の指導方法
4. 中学校社会科・地理的分野の授業作りにおける指導例と省察
5. 今後の課題

1. はじめに

地理学は本来、きわめて学際的で広領域にわたる重要で魅力的な学問である。地理教育も、本来、楽しく、魅力にあふれた領域である。しかし、文部科学省の学習指導要領によって、特に中学校では「調べ方を学ばせる」ことを強く求められており、そのため現場では様々な工夫がなされているが、必ずしもその面白さを伝えられていないのが現状であろう。

筆者は中央学院大学・商学部に着任したと同時に、中央学院大学全学教職課程運営委員会に籍をおき、教職課程履修学生の指導にあたってきた。本学では高等学校の「商業」、「情報」、「地歴」、「公民」と中学校の「社会科」の教員免許が取得可能になっている。その中で、筆者の専門研究分野とのかかわりから、高校地歴（特に地理）と中学校社会科（特に地理的分野）の教科指導に強くかかわってきた。ただ高等学校における教育実習において、地理を教壇実習する履修学生が少ないため、地理の授業作りに関する指導は中学校社会科の教育実習生に対するものがほとんどである。そこで本研究では、中学校社会科学指導要領の変遷を概観し、特に現行学習指導要領にもとづいた地理的分野の目標とそれに対応した授業作りにおける工夫について指導例をもとに省察する。

2. 中学校社会科学学習指導要領における地理的分野の特徴と変遷

(1) 1946年～1977年版学習指導要領

戦後の学習指導要領は1947年版「学習指導要領社会科編Ⅱ」（文部省、1947）に始まる。この指導要領では問題解決の活動を中心とした総合社会科が提唱され、1956年版学習指導要領（文部省、1956）まで継続した。中学校

における地理学の学習内容は、総合的な学習が原則であり、「わが国土はわれわれに、どんな生活の舞台を与えているか」という單元においても、昔と現代とではいろいろ違っていることの理解が目標に取り上げられており、そのため地理的な学習でありながらも歴史的な学習も行わねばならなかった。1956年版学習指導要領では、先の学指導要領に対する様々な批判を受けて、大規模な改訂が行われた。最大の改訂は、中学校社会科が地理・歴史・政治経済社会（公民）の三分野に分けられたことである。この学習指導要領における中学校社会科地理的分野では、生産様式における地域的特色の理解、郷土・国家・世界の一員としての自覚、自然環境を人間活動のために準備された環境可能体としての認識などが目標とされた。簡潔にその特徴を指摘すれば、中学校の地理的分野では地誌学習が重視されるようになったといえる。しかし、国名・地名、産業、風俗などが非系統的に出てくる知識羅列方・静的地誌学的な学習にならざるを得なかった。なお、この時の改訂で地理学習は、小学校では総合社会科で、中学校では先述のように地誌学習を重点的に、高校では系統地理学習を通じて行われることに規定された。1969年版学習指導要領（文部省、1969）では、中学校・社会科各分野の履修配当学年において新たな原則が示された。1・2年次に地歴並行学習のあとに公民的分野を学ぶ、いわゆるπ型学習が明示された。地理的分野では身近な地域→日本→世界と学んだ後に、世界の中の日本を学ぶようになった。これは中学校における地理学習の目標が、国土認識に焦点化されたことによる。1977年版の中学校学習指導要領（文部省、1977）では、小学校6学年で学習していた世界地理が省かれ、中学校へ移行した。これを受けて、中学校では日本を主たる学習対象とすること、また世界地理を先に学習することになった。

（2）1998年・2008年版学習指導要領

1998年版学習指導要領（文部省、1998）は、完全学校週5日制のもと、ゆとり教育を展開し、生きる力を育成することを改訂の基本的なねらいとしている。中学校社会科では、国際社会において主体的に生きる日本人としての

資質や能力を育成するために、自ら学び自ら考える力を育成することが重要視された。そのため、網羅的・知識偏重の学習にならないように、学習内容を基礎的、基本的ことがらに厳選し、学び方や調べ方の学習、作業的・体験的な学習、問題解決的な学習など、子どもの主体的な学習が重視された。なお、高等学校では1987年12月の教育課程審議会において、高校社会科を地歴科と公民科に再編成し、地歴科の世界史を必修とする答申を受け、実施された。なお、2003年学習指導要領一部改訂において、ゆとり教育の目玉科目として総合的な学習の時間が創設されている。

1998年版学習指導要領における中学校地理的分野では、国土理解が基本的な目標であるが、学習内容の構成が以下のように大きく変わった。(1) 世界や日本の地理的認識を深める上で、基礎・基本となる知識を身につけさせる、(2) 地域的特色をとらえる視点や方法を学び、学び方を学ばせる、(3) 世界と日本を比較関連させてとらえるという学び方を学ばせる。特に、(2)、(3)では子どもの主体的な学習が重視されており、学習指導要領の基本的な方針が明確に反映されている。知識を身につける項目と方法を身につける項目が分離されたといえる。ところで、歴史的分野や公民的分野でもこうした方針が取り入れられているが、内容構成にはほとんど変化はみられない。地理的分野のみが、学習指導要領の基本的なねらいに沿って、大転換がはかられたと断言できよう。なお、高校地理においても、1989年の地理Aの主題学習への変更が続いて、地理Bも系統地理学習から離脱した。本学習指導要領については、学力低下を招くという批判が施行当初から強かった。現在、小学校・中学校・高等学校で行われている地理、そして大学で行われている地理学教育は様々な課題を抱えている。たとえば、中学校・社会科の「地理」によれば、1998年版学習指導要領により日本の諸地域について国内では2～3の都府県を、世界においては2～3の国のみを選択して学習することになっている。その結果、学び方の学習が重要視され、地理的基礎知識の不足が指摘されていた。2008年版学習指導要領(文部科学省, 2008)によって、多少ではあるが、基礎的知識をふまえた地理学習への変換がはかれようと

している。特に、地図の読図や作図、景観写真の読み取りなどの地理的技能を身につけさせることなどが一層強調されるとともに、世界と日本の諸地域を動態地誌的に学習すること、身近な地域の調査では社会参画の視点が新たに加わった。なお、中学校では2012年度から新学習指導要領が全面実施され、それまでは周知・移行期間となっている。

3. 新学習指導要領に基づく地理的分野の指導方法

2008年版新学習指導要領に基づく中学校社会科・地理的分野の学習の目標は従来通り、「地理的な見方・考え方について、地理的技能を身につけながら、事例をもとに学び方や調べ方を学ぶ」ことであると考えられる。この目的に対して、従前から多くの研究者が地理教育のあり方について論及している。

山口（2002）は、知識・理解に重点をおくのか、態度化も重視するのかによって、地理教育のあり方や目標は大きく異なってくることを指摘している。井田（2005）は、従来の地理教育が知識・理解に重点がおかれていたが、その知識・理解をどう自分たちの生き方と結びつけるのかといった態度化までは、教育の現場で意図的には育成されてこなかったと述べている。こうした態度化までも、教育の現場に課するのは酷であろう。斉藤（2003）は、義務教育段階における地理教育の中心は世界地理（地誌）教育であるべきであり、生徒に自らの世界像を形成させることを主目的とすべきと述べている。世界地理教育を中心にすべきかどうかは議論のあるところであろう。しかし、地理教育の主目的は地理的な見方・考え方を与えることであり、新学習指導要領も態度化まで求めているとはいえない。学指導要領における「地理的な見方・考え方」はすでに1955年版学習指導要領に始まると考えられ、菊地（1960）はその内容・意味について説明している。なお、学習指導要領における地理学的な見方・考え方は、各年次版学習指導要領解説に記載されている。

学び方や調べ方を学ぶあり方についても種々の指摘がなされている。学び方に関連して、現時点における各国の産業や立地点、主要な貿易品を覚えて

も、10年後に変化しているかもしれない、それならば覚えるのではなく、そうした情報を手に入れる技能を学ばせればよいという考え方が一部の地理教育者の間にみられる。こうした考えは短絡的で、時代を超えて、普遍的に考えるために必要な知識を学ばせることが地理教育に必要である（中村ほか、2009）という主張は正論であろう。調べ方を学ぶありかたについて、中村ほか（2009）は、なぜと感じさせ、知りたいと思わせ、そうかと気づかせる授業構成が必要であると述べている。新学習指導要領における社会科・地理的分野の目標からすれば、こうした授業実践が求められているのは確かであろう。地理的分野に求められている目的の中で、筆者は特に「生徒自らが調べ方を学ぶ」ことを学ばせることが、重要であると考えている。そこで、教職課程で学ぶ学生が教育実習の場で実践した授業をもとに、筆者が行っている指導事例を次章で紹介し、省察する。

4. 中学校社会科・地理的分野の授業作りにおける指導例と省察

本学教職課程における中学校社会科の授業作りについての指導は、主に教科教育法（社会科・地歴科教育法、社会科・公民科教育法）の中で行われており、他に地理的分野の授業づくりについては講義科目（自然地理学概論、人文地理学概説、地誌学）の中でわずかであるが、行われている。しかし、現状においては授業の作り方に関する特別な科目が用意されていないため（文部科学省の指導になかった、ということである）、十分な指導が行なわれていないのが現状である。そこで、教育実習に行く前に学生に「模擬授業」（一人の学生が授業者となり、他の学生を生徒役にして行う）を行わせ、授業の作り方（教材研究、学習指導案の作成、話し方や黒板の使い方など）を指導する。学生は教育実習校における指導教諭、配属学年・学級、（教壇）実習時に教える分野と単元などが決まると（4月～5月頃に決まる場合が多い）、この模擬授業を行って実習の最終準備を行う。教育実習は4年次の5月～7

月に行われる場合が多いが、教育実習がもう目の前にせまっており、十分な準備時間がとれているとはいえない。本学教職課程では、教職課程教員が学生の実習校を教育実習期間中に訪問、指導することになっている。厳密ではないが、学校を訪問する教員はおおよそ実習教科を専門とする者になる場合が多い。この教員が学生を最終準備段階において指導するわけであるが、筆者の場合、中学校・社会科で実習する学生を指導する機会が多かった。指導した学生の中には、地理的分野を教壇実習した学生も多い。先述したように、地理的分野は歴史的分野や公民的分野とは異なり、学び方や調べ方を学ばせねばならない。実習生もたいへんにやりづらい分野という認識を持つものが多い。そのため、地理的分野の教壇実習生を担当した際は、事前の模擬授業による指導に加え、教育実習期間中も学生と連絡をとり、場合によっては授業作りを指導、助言することが多い。

以下に地理の授業作りに関する指導例を、中学校社会科の教育実習生が行った研究授業時における学習指導案によって示す。学習指導案は授業の設計図であり、ここに1時間の授業の目標や授業の展開などが記される。研究授業など、第三者に授業を公開する際には、授業者はこの設計図に従って授業を行うのが一般的である。筆者は学生を指導して下さる中学校指導教諭の指導方針を最大限に尊重している。そのため、実習期間中の学生への指導は、学生から助言を求められた際に行うことを原則としている。ここに掲載する指導案は、筆者が体裁を整えるために書き直したものであるが、文言は加筆・修正していない。ただし、教育実習校名、実習生氏名、指導教諭名などは省略した。また、指導単元に関する記載なども、文章を短くするために省略している。

<学習指導案事例1> 2009年6月に千葉県の中学校で2年生を対象として行われた研究授業で、本授業の単元は世界の国々「アメリカ」(調べ学習のまとめ)である(学習指導案事例1参照)。研究授業までの経過は以下の通りである(各1時間)。「アメリカの資料を集めよう」→「大規模な農業」

<学習指導案事例1>第2学年〇組 社会科学習指導案

場 所 2年 〇組
 指導教諭 〇〇 〇〇
 授 業 者 〇〇 〇〇

1 単元名 世界の国々の調査

2 単元について

- (1) 単元観 省略
 (2) 生徒の実態 (男子〇名, 女子〇名, 計〇名) 省略
 (3) 指導観 省略

3 単元(題材)の目標

観 点	目 標
社会的事象への 関心・意欲・態度	・日本と密接な関係にあるアメリカが世界で様々な面で強大な国であることを知り、日本との関係も考えながら、興味を持って調べ学習に意欲的に取り組もうとしている
社会的な 思考・判断	・さまざまな資料をもとに、適切な課題を見だし、さまざまな視点から考察することができる。
資料活用の 技能・表現	・分布図などから、農業や食生活と気候との関連や、鉱山資源と工業地域との関係を読み取ることができる。
社会的事象についての 知識・理解	・日本との貿易や文化の交流を通じて、両国の密接な係わりを理解し、その知識を身につけている。

4 指導計画(7時間扱い)

時数	主な学習活動	評価観点	評 価 基 準	方法
			※努力を必要とする生徒への働きかけ	
1	アメリカの情報を集めてみよう ・中心テーマと小テーマの設定	興味・関心・ 態度 思考・判断	・アメリカが世界でも強大な国であることを知り、それに関係する事柄について意欲的に調べようとする。 ・いろいろな情報から適切な課題を設定し、課題解決のための視点や方法を考察しながら、実行する。	ワークシート 写真 アンケート ワークシート 観察

2	大規模な農業 ・各地の農業と主食 ・農業と気候との関連 ・	技能・表現 思考・判断	<ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな資料から、アメリカの農業と各地域の特色を読み取る。 ・農業や食生活の特色を気候と関連付けて考察・判断することができる。 	ワークシート 地図帳 ワークシート
3	巨大な工業力 ・鉱山資源と工業地域とのかわり ・発展する沿岸工業地域	技能・表現 知識・理解	<ul style="list-style-type: none"> ・分布図から鉱山資源と工業地域との関係を読み取っている。 ・アメリカが車社会であるということもあり工業が発達していること、また、いろいろな格差が生じていることを理解することができる。 	発表 地図帳 ワークシート
4	様々な民族 ・様々な民族を受け入れる国家 ・多民族国家の背景	知識・理解	<ul style="list-style-type: none"> ・アメリカには様々な民族があることを調べ、貿易や文化交流などいろいろな視点や方法があることを理解している。 	
5	アメリカの文化 ・アメリカから世界に広がった文化 ・逆に日本からアメリカに伝えた物	興味・関心・態度 知識・理解	<ul style="list-style-type: none"> ・アメリカ生まれの世界に広がった文化に興味を持ち意欲的に調べようとする。 ・アメリカの文化だけではなく日本からアメリカに広がった文化に気付き理解している。 	ワークシート 写真 ワークシート 実物
⑥ 本時	日本とアメリカの比較 ・日本とアメリカの中学生の比較 ・模造紙(表)の作成	興味・関心・態度 技能・表現	<ul style="list-style-type: none"> ・アメリカ生まれの世界に広がった文化に興味を持ち意欲的に調べようとする。 ・アメリカの文化だけではなく日本からアメリカに広がった文化に気付き理解している。 	模造紙 米国の先生 レポート

5 本時の指導(6/6)

(1) 目標

・アメリカと日本の中学生の違いや共通点を知り、アメリカに対して関心が持てる。

(関心・意欲・態度)

・日本とアメリカの相違について、自分なりの考えをまとめ、表現ができる。

(技能・表現)

(2) 展 開

時配	学習活動と内容	形態	教師の働きかけと配慮事項	資 料
3	1 前時の確認 質問事項 ①宿題②登下校 ③学習内容④部活動 ⑤銃社会⑥外国語学習 ⑦給食⑧日課 ⑨長期休業	一斉	・前時の授業内に行った、アメリカの中学生についての疑問・質問を確認させる。 ※何人かを指名し、疑問点を確認する。	模造紙
2	2 本時の学習テーマを確認する。 ・日本とアメリカの相違	一斉	※プリントを配り本時の課題・質問を再確認させる。	プリント
「日本とアメリカの中学生の違いについて、考えよう」				
25	3 質問事項について日本とアメリカの相違を考える。	一斉		
(7)	・日本の中学生はどうか発表する。		・日本の中学生は、どうかを発表を促す。 ※多くの生徒に発言させるよう心がける。	模造紙
(18)	・アメリカの中学生はどうか班で考え、予想を立てカードに記入し、発表する。	班別	※プリントの記入状況を観察しながら、書けない生徒には個別に支援していく。 (評価) 日本とアメリカの中学生の相違について関心を持って話し合いに参加できたか。 (関心・意欲・態度)	
15	4 アメリカの中学生について米国の先生の話聞く。 ・聞いた内容を学習プリントに記入する。	一斉	※ ALT の米国の先生をみんなで温かく迎え、集中した態度で聞くことができるように配慮する。 ・米国の先生に事前に用意した質問事項をひとつずつ答えてもらう。 ※聞き漏らさないよう、メモをとらせる。	米国の先生 解答用紙
5	5 アメリカと日本の相違点・共通点を振り返り、印象に残ったことをまとめる。	個別	・自分なりの意見でまとめ、表現ができる。 (評価) 日本とアメリカの中学生の相違について理解でき、論理立てて文章にまとめられたか。(技能・表現) ※落ち着いた雰囲気の中、今日の授業を振り返らせる。	プリント

→「巨大な工業力」→「様々な民族」→「アメリカの文化」（ここまで実習生が普通に授業）→「日本とアメリカの比較（本時）」である。本時は教科書には記載がなく、研究授業用に特別に設けられた時間となっている。目標は「アメリカと日本の中学生の違いや共通点を知り、アメリカに対して関心を持てる」ことである。最初、本時の学習テーマを書いたフラッシュカード：「日本とアメリカの中学生の違いについて考えよう」を黒板に示し、さらに教室の黒板に大きな模造紙が用意されていた。模造紙は縦に3列に分けられており、左から①日本の中学生、②質問、③アメリカの中学生となっている。②質問には、前時にアンケートした内容（生徒が聞きたいこと）がすでに大きな活字ではられていた。その内容は1：宿題を忘れるとどうなるか、2：どうやって登下校するか、3：どのような教科を勉強しているか、4：部活動の種類は、5：中学生は銃をもてるのか、6：外国語はなにを勉強しているか、7：給食はあるのか、8：学校での日課（時間わり）、9：夏休みはどのくらいか、である。ここでグループに分けて、グループごとに質問1から9について①日本の中学生の回答を考えさせた。生徒の回答を聞いて、カードを模造紙にはっていったあと、③アメリカの中学生の回答を予想させた。グループごとに質問1から9までを分けて、カードを配布し、予想を記入させた。教室に來られていたアメリカ人の先生（アシスタント教員制度によって、この中学校で英語の授業をサポートしている）に前にでてもらい、③（実際の）アメリカの中学生について説明してもらった。米国の先生が、アメリカの中学生の夏休みの長さ、夏休みには「宿題」がないこと、また、ふだんの「宿題」はアメリカでは成績評価の際、重視されると教えたときに生徒たちが盛り上がった。また、アメリカでは全州で中学生の銃の所持は禁止されていること、自分は今まで一度も本物の銃にさわったこと、見たことがないことを伝えた時は、教室が静まったのが印象的であった。また、アメリカの中学生は外国語として、現在「スペイン語」を選択する人が圧倒的に多いこと、フランス語、ドイツ語は人気がない、ことなども生徒の興味を引いていた。

先生の説明の後、生徒たちに今日の授業で「印象に残ったこと」をグループごとにまとめ、配布した用紙に記入させたところで、時間がなくなり、完成は次の時間に持ち越しとなった。非常に明るい表情で、大きな声のでていたこと、教材準備がよくできていたこといえる。ただ、実習生がフラッシュカードをはるたびに、生徒はそれをノートに写そうとするため、「考える場面」、「発表を聞く場面」、「作業（ノートをとる）場面」であることをもっと指示したほうがよかったのではないかと思われた。私は中学校らしい、良い授業であったと感じた。

研究授業は構成がきわめて優れていた。これは実習中学校の指導教諭が英語の授業をサポートしてくれているアメリカ人に、アメリカの文化に関する質問に答えてもらう形の授業を考案したことによる。現行学習指導要領に書かれた地理的分野の学習のあり方を高いレベルで理解し、実践されていると感じる。筆者は、学生との連絡の中で、生徒の興味・関心をひくために、生徒に日本との比較でアメリカの生活に関する質問をださせ、それについて調べさせるような授業作りを助言していた。しかし、雑誌、書籍、インターネットなどによって調べるのではなく、直接に米国人に質問するという調べ方の方が、情報源により近いことや、生徒の授業への参加意欲をかきたての間違いはない。

<学習指導案事例2>2009年6月に千葉県の中学校で1年生を対象として行われた研究授業で、都道府県を調べる：「岩手県」の調べ学習の発表とまとめを行った（学習指導案事例2参照）。ここまでの授業の流れ（授業計画）は、1時間目：岩手県の地形と主な都市（実習生が通常の授業スタイルで行った）+グループ分け（人口・気候・農業・工業・観光）、2・3時間目：パソコン教室・図書室を使った資料収集と指導、4・5時間目：資料のまとめ（模造紙に）と発表練習、その指導、5時間目：グループごとの発表と岩手県のまとめ（本時）、である。

授業はグループごとに教室の前に出て、発表内容をまとめた模造紙を黒板

<学習指導案事例2>

平成21年6月11日(木)第1時限

社会科地理的分野 学習指導案

指導教諭 ○○ ○○

実習生 ○○ ○○

1. 単元名 都道府県の調査 『さまざまな地域からなる岩手県』

2. 単元について

- (1) 単元観 省略
- (2) 生徒観 省略

3. 単元の目標

- (1) 資料を利用して協同で作業をし、読み取る能力を身に付けさせる。
- (2) 調べ方、発表、まとめ方を理解し今後の調べごとに活かさせる。
- (3) 岩手県内で地域ごとに気候や人口が違うことに気付かせ、そこに関連づけて工業や農業が行われていることを理解させる。

4. 指導計画

- (1) 岩手県の地形を理解する・・・・・・・・・・・・・・・・・・1時間
- (2) パソコンを使って情報を集める・・・・・・・・・・・・・・・・2時間
- (3) 集めた情報をまとめる・・・・・・・・・・・・・・・・・・2時間
- (4) まとめた情報を発表し地域ごとに理解する・・・・・・1時間・・・・・・
本時

5. 本時の指導

(1) 目標

- ① 発表させることで『発表力』を身に付け、準備する方法を理解する。

- ② 他の班の発表を聞くことで岩手県の特徴を理解し、聴く能力を身に付ける。
 ③ 発表を聞き協力することで地域ごとの特徴を理解する。

(2) 展開

過程	学習活動の内容	指導上の留意点	評価の観点
導入 5分	発表の仕方や時間などを説明する。	・スムーズに展開するために本時の流れを伝える。	
発展 35分	<p>各班ごとに発表させる。 (各班5分×5) 25分</p> <p>①各班で発表させる。 ②各班全員前に出させ参加させる。 ③発表する資料を黒板に出し発表させる。 ④発表終了後にフォローや補足を入れる。</p>	<p>・各班ごとに発表を終えたらコメントすることでモチベーションを保たせる。 ・発表に苦しんでいる場合は支援をし、スムーズに展開する。 ・各班で発表をしっかりと聴かせるために各班ごとに疑問に思ったことなどを書かせる。 ・各班の発表を思い出させるように用紙を前に並べ理解しやすくする。</p>	<p>調べたことを発表しようとしたか。 〈資料活用・表現〉</p> <p>別の班の発表を聴くことができたか。 〈関心・意欲・態度〉</p> <p>岩手県について理解できたか。 〈社会的思考・判断〉</p> <p>進んで授業に参加しようとしたか。 〈関心・意欲・態度〉</p>
まとめ 10分	<p>気付いたことを各班で確認する。 気付いたことを各班でまとめて一部紹介する。</p>	<p>各班で気付いたことをアンケート形式で書かせることで全員参加させる。 気付いたことを一部紹介し理解させる。</p>	<p>班で気づいたことをまとめる作業に参加したか。 〈関心・意欲・態度〉</p>

に磁石でとめて発表していく。全員が必ず、発表する（発言する）ことを義務付けており、さらに事前に練習をしていたので、発表はスムーズであった。時には、資料の漢字が読めなくて往生する生徒もいたが、授業者（学生）が適宜、サポートしていた。中学1年生にかかわらず、時々、高いレベルの調べ、まとめがみられた。たとえば、農業グループは、岩手県の輪郭図に農産物を書き入れてあり、表に農業生産品目ごとに全国で何位、東北で何位と記載され、岩手県は東北の中でも農業が盛んだこと、また寒冷な気候を利用した農業（りんごやホップ栽培）や酪農が盛んだとまとめた。気候グループは東京と盛岡の気温、降水量を比較した図を用意し、ずいぶんと寒くて、意外と冬季の雪が少ないなどとまとめた。授業者は各グループの発表を終えるごとに、適切で好意的な講評をしていた。発表を終えると、他のグループの発表で気づいたこと（自分のグループの発表に関連して）、聞きたいこと（質問）を話し合わせ（5分間ほど）、配布した用紙に記入、提出させた。授業者はこれを利用して、岩手県の特徴をまとめてゆく予定であったが、時間がなくなり、最後のまとめには至らなかった。生徒が楽しそうに授業参加しており、他のグループの発表をまじめに聞いていたのがとても印象に残った。

この授業は地理的分野の最初に登場する調べ学習である。そのため、1年次に行われる場合がほとんどであり、地理的分野の学習方法を中学生に知らせる意味において、また、地理が嫌いにならないためにも失敗が許されない重要な単元であると考えられる。「都道府県を調べよう」という教科書には、事例として岩手県が掲載されているが、場合によっては中学校所在地の都道府県を調べる場合もある。筆者は学生に対して、事前に千葉県（中学校所在地）と岩手県のそれぞれのパターンで教材研究をさせ、簡略ながら模擬授業を行わせ指導した。しかし、準備時間が少なかったために、教材研究が十分になされなかった。やむを得ず、中学校の指導教諭に（学生から）岩手県の調べ学習を提案させたところ、指導教諭がパソコン教室、図書室を使った「完全な調べ学習」による授業提案を受け入れてくださった。授業計画で重視されたのは、調べ方を学ぶのにパソコンや書籍を使った「生徒による調べ学習」

を目標としていることである。筆者にとっても、5時間にわたって1単元を生徒自らの調べ学習に費やすことは、それほど経験がない。指導教諭も初めての試みであったらしい。調べ学習の途中で、パソコン教室のプリンターが壊れていて、資料が打ち出せなかったり、グループによっては与えられた項目以外の調べに熱中したり、また調べた内容を簡潔にまとめることが難しかったようである。こうした様々な困難があったようであるが、中学校の指導教諭の格段のご指導・ご配慮によって、各場面で解決してきたようである。授業を受けた生徒たちからは、楽しかったと言う感想が多くよせられたそうである。こうした授業を構成して下さった中学校の指導教諭に感謝申し上げたい。ただ、中学校のある千葉県を取り上げることができれば（教材研究がたいへんであるが）、より一層、生徒の興味・関心をひきつつ、調べ方を学べたのではなかろうかと感じた。

5. 今後の課題

新学習指導要領に示された中学校社会科の地理的分野の学習目標は、歴史的分野、公民的分野と比較して明らかに異なっているが、逆に中学校段階で調べ方を学ばせることができるのは、確かに地理的分野でのみ可能かもしれない。しかし、地理的分野の教材に普遍的に考えるために必要なものが選ばれているとは必ずしもいえない。今後、学習指導要領および教科書の内容をより精査する必要がある。

高校地理、中学校・社会科地理的分野については、教科書の記載内容（基本的な系統地理学および地誌学）を教職課程で学んでいる学生に理解させることが筆者の第一の責務であると考え、授業の作り方に関する指導を強めねばならないと感ずる。教えることと自ら学ばせることは、方法において大きく異なる。地理的分野では自ら学ばせるような授業を作らねばならないことを経験、理解させた上で、教育実習に送り出したいと考える。

参考文献

- 井田仁康 (2005) : 『社会科教育と地域－基礎基本の理論と実践－』, NSK 出版
- 菊地利夫 (1960) : 『地理学習の原理と方法』, 金子書房
- 斉藤 毅 (2003) : 『発生的地理教育論－ピアジェ理論の地理教育論的發展－』,
古今書院
- 中村和郎・高橋伸夫・谷内 達・犬井 正編 (2009) : 『地理教育の方法』, 古今
書院
- 文部省 (1947) : 『学習指導要領 社会科編Ⅱ (第7学年－第10学年) (試案)』
- 文部省 (1956) : 『中学校学習指導要領 社会科編』
- 文部省 (1969) : 『中学校学習指導要領』
- 文部省 (1977) : 『中学校学習指導要領』
- 文部省 (1998) : 『中学校学習指導要領』
- 文部科学省 (2008) : 『中学校学習指導要領』
- 山口幸男 (2002) : 『社会地理教育論』, 古今書院

